実践から探るスペシャリスト活用の知

小谷　　透（東京女子医科大学医学部
麻酔科学教室・中央集中治療部）

スペシャリストとは、業務上で他者との明確な差別化の要素となるような、特定の分野に関する深い知識や専門的な技術を持ち、その分野に特化して仕事をする人のことを言います。スペシャリストは、分野を特化して仕事をするため、単独もしくは少人数で業務に当たる方が、成果が上がることが多いようです。思いつきやすい例としては、NASA のスペースシャトルに搭乗していたミッション・スペシャリストがあります。彼らはひとりひとりが完成された科学者でそれぞれが研究の専門領域を有しており、それぞれの得意分野について別々のスケジュールをこなします。スペシャリストの数だけの多様性が得られます。しかし、宇宙空間に運んでいける器材や資料には限りがあります。予算も膨大ですから、有効利用しなければなりません。そこでミッション全体の成果を統括するかじ取り役が重要となります。

医療の分野でも専門化が進んできました。臓器別、治療内容別のスペシャリストが育成され、医療はめざましく発展する時代となりました。やがてその治療法はスタンダードとなり、特に女子医大のような先進医療を行う施設では、スペシャリストの治療が標準レベルとなっていきます。医師はさまざまな研修を受け成長しますが、スペシャリストによる教育や指導が必要となります。

ところが、ある分野に特化しすぎると医療はうまく流れません。病気がどういう類のもので治療にはどういう技術や知識や道具が必要かを判断しスペシャリストのもとに送り届ける過程がなければスペシャリストを有効活用されません。宝の持ち腐れになります。医療全体としては、そしてスペシャリストを利用するには、スペシャリストに患者を届けるまでの経路を確立しなければなりません。また、スペシャリストが興味を示さない一般診療をやる医療者がいなければ医療そのものが成り立ちません。スペシャリストが存在できるためには、医療全体がチームとして機能しなければなりません。単なる Specialist の寄せ集めでは、目的地に到達する前にチームが空中分解する可能性があります。医学において総合診療科学や家庭医学が見直されている背景には、こういった反省が含まれているのかもしれません。

私が日常行っている集中治療の現場では、複数の重要臓器の治療について治療方針が互いにぶつかることがあります。例をあげると、肺の治療のためには体内の水分がぎりぎりまで絞られたほうがいいのですが、腎臓の治療では脱水は腎不全を生じる最大の要因となっています。ある患者で呼吸不全と腎不全がともに存在する場合、正反対の輸液療法を行うことになり混乱を導きます。正しく結論を導けるかどうかが、好ましい予後が得るための分岐点になります。私たち集中治療医の役目は、臓器治療のスペシャリストだけでなく、スペシャリストの意見を尊重しつつ全体の治療を支障なく進めていくかじ取り役でもあるのです。

こういったことを考えていると、現代の医療にはスペシャリストだけではなく、別の範疇の医療者が必要であることがはっきりしてきました。

スペシャリストの対義語としてジェネラリストがあります。ジェネラリストは、特定の分野ではなく複数の専門分野においてある一定以上の知識や技術を持ち、仕事をしていく人のことを指します。ジェネラリストは、分野をまたがって仕事をするため、基本的に複数のスタッフと協力しながら仕事をすることが求められ、自分の仕事以外にも興味を持って業務に取り組む人が多くなる傾向にあります。つまり、ジェネラリストこそスペシャリストが溢れる現代医療を効果的に行うために必要な医療者のカテゴリーであり、ジェネラリストとスペシャリストはチーム医療ではその存在が欠かせないことがわかります。

しかし、ジェネラリストのあるべき姿はスペシャリストほど明確ではありません。広く浅くといっても曖昧で何をどこまで習得すればいいか、ピンときません。それは現時点で目標が定められていないからで、これからの課題といえます。ジェネラリストを育成し活用するには、まず対象となる医療（治療）の標準レベルを全国規模で確立することです。次にジェネラリストとして習得すべき標準レベルを明確にすることです。また、その中でスペシャリストと仕事をする機会を与えられ、スペシャリストの何たるか、を学んでおかなくてはなりません。これによってジェネラリストがその効果を発揮することができ、スペシャリストを有効活用することで医療の効果も倍増するはずです。

話を集中治療に戻します。かじ取り役として重要なのは、治療全体のバランスを保つ感覚です。ある臓器の治療を優先させる代わりに別の臓器の治療を結果として遅らせなければなりません。そのことで治療全体が不利益を被ることなく最大の治療効果を発揮させなければなりません。このバランス感覚は集中治療の中でチーム医療に参加していくことで身につくはずです。時間はある程度かかることは覚悟していただかなくてはなりませんが。

集中治療医にとって、専門的立場からアドバイスをくれるスペシャリストは欠かせない存在です。教育的立場で指導してくれるスペシャリストはさらに欲しい存在になります。しかし、スペシャリストを使いチームをまとめるジェネラリスト が自分を常に補助してくれたら、どんなに日々の診療が楽しくなることでしょう。

看護の分野でもスペシャリストを目指す人は多いでしょう。スペシャリストであることで自分を強くアピールすることができます。そのための勉強や研修は大変ですが、やりがいのあるチャレンジであることに疑いの余地はありません。では、ジェネラリストはどうでしょうか？スペシャリストに比べ地味で曖昧な印象がありますが、これも「ジェネラリストになるんだ」という明確な意志を持って研修しなければ習得できないでしょう。「スペシャリストでない人」イコール「ジェネラリスト」ではありません。私はこの機会にあえてジェネラリストを応援したいと思います。

がんばれスペシャリスト、負けるなジェネラリスト。